

「保育内容（表現）」における複合的教材の試み —「造形表現」「音楽表現」「身体表現」を一度に楽しむ—

小笠原 大輔*

Key Words : 保育内容（表現）、ペットボトル・マクレレ

1. はじめに

幼稚園教育要領および保育所保育指針における保育内容5領域のうちの一つ「表現」では、感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにすることを目指している。この表現は、言語表現、音楽表現、造形表現、身体表現などから成り、幼児の活動の場ではこれらが単独で、あるいは複合された形で表出、具現化される（高野・小田，2002）（名須川・高橋，2006）。特に遊びの中ではこれらが密接に関係しあって現れることが多い。従って、幼児による別個ではない「一まとまり」の表現を見取り、援助するために、保育者はこれらの表現手法や教材を複合的に経験・習得しておく必要がある。ところが、保育士養成課程のカリキュラムはそれぞれの科目担当者が教科の枠内で行うのが現状であり、学生にとってそれぞれの科目で学んだ内容を自分の中で関連付けた一つの活動として構成することは難しい（智原・下口，2008）。そこで、本授業において「造形表現」「音楽表現」「身体表現」を複合的・横断的に行う為の教材として「ペットボトル・マクレレ」を取り上げ、この教材を体験することによる受講者の学びの様相を、受講者によるアンケートの集計結果および著者による観察から探り、表現教育の教材としての可能性を検討した。

マクレレとは、2人が両手に短い棒を持って互いに向かい合い、歌と太鼓のリズムに合わせて踊りながら、棒を打ち合うブラジルの民俗芸能である。刀が使われることもあり、火花を散らしながら踊るその様はまさに圧巻である。奴隷制時代、黒人奴隷が剣の代わりとしてサトウキビの茎を使って戦いを模し、抑圧された生活に対するはけ口として踊った。また、仲間の奴隷をキロンボ（共同体）へ逃がす際に、守衛や見張りの白人の目を集めるために円を作り、カモ

* 人間学部人間福祉学科

フラージュして踊っていたのが起源とされている（三田・ミタ，2005）。ペットボトル・マクレレは、このマクレレからヒントを得て著者が考案したもので、棒の代わりにペットボトルを加工してマラカスを作り、これを用いて行う遊びである。

2. 方法

人間福祉学科2年生38名（当日欠席者7名）の授業「保育内容（表現）」において、2週にわたり（全15回中2回）、ペットボトル・マクレレを行った。マクレレの説明および制作に必要な材料を各自で用意する旨を、前の週の講義終了後に伝えた。第1週目ではマラカスの制作および作品観賞会を行い、第2週目ではリズムの習得とダンスの創作および発表を行った。第2週目の授業終了後に、自由記述による感想文の提出および4件法によるアンケート調査を行った。

アンケートの回答選択肢は「そう思う」「まあまあそう思う」「あまりそう思わない」「まったくそう思わない」である。尚、統計的解析には、簡易化を目的として意味づけ併合法を用い、「そう思う」と「まあまあそう思う」を併合し「思う」とし、「あまりそう思わない」と「まったくそう思わない」を併合し「思わない」としてJavaScript-STARを用い、直接確率計算（両側検定）を行った。

今回行ったアンケートは無記名で行い、その調査結果及び授業風景写真を本論文に掲載する旨を受講者に伝え、承諾を得た。

3. 結果および考察・授業の様子

(1) 第1週目：マラカス制作および作品観賞会

前週の講義終了後に、以下のリストを配布した。

＜用意するもの＞

- ・ ペットボトル2本 ※できれば同じ形のものがよい
- ・ ヤクルト等の小さなボトル2本 ※握りやすくするために必要です！
- ・ 中に入れる物 …ビーズ，ボタン，小石，米，小豆など
- ・ 装飾グッズ …シール，色紙，油性マジック，カラーテープ等
- ・ 文房具 …糊，ハサミ，テープ類

マラカスの中に入れる物として多かったのは、あらかじめリストで挙げていたビーズ，米，

小豆であったが、ポップコーン、木の実、アイスの棒などの変わり種もあり、バラエティに富んでいた（図1）（表1）。



図1 カラフルなビーズ

表1 中に入れた物の種類と人数

種 類	人数	種 類	人数
ビーズ	21	アイスの棒	1
米	16	ビー玉	1
小豆	5	おはじき	1
ポップコーン	2	ボタン	1
木の実	2	マスコット	1
クリップ	1	小石	1
アルミホイル	1		

上位3つは他の物と比べて持参した数自体が多く、学生同士で分け合ったり、交換したりすることが可能であることから、持参した人数よりも使用した人数が多くなっている。また図2のように、数種類の物を混合して入れる者も多かった。これは、マラカスを振った時の音の聞こえ方が、1種類の時よりも数種類入れた時の方が良いことに、学生の1人が気づき、そこから伝播して周りにいた学生もその方法を取り入れたことによる。このように、制作手順の一つとして「ペットボトルの中に物を入れる」と挙げられているだけなのだが、実際には「何を入れるか」「分量はどのくらいにするか」「何色のビーズにするか」など、音の聞こえ方にこだわるのか、見栄えにこだわるのか、どちらでもなくとにかく頑丈さにこだわるのか、など、自分の気に入ったものに仕上がるように何度も試行錯誤を繰り返して創作に励んでいる者がほとんどであった。

装飾グッズとしては、やはりシール類が圧倒的に多かった。キャラクター物をはじめとして、



図2 米と小豆を混ぜて入れた例



図3 様々なシール

携帯電話を装飾する為に市販されているラメ入りのものやラインストーンなどきらびやかなものまで、その種類はかなりの多い（図3）。

シールも中に入れる物と同様に、互いに持ち寄った物を交換する場面が多く見られた。このシール交換は現代の子どもの中でも流行っており、女子学生も「懐かしいね」と言いながら、このシール交換の行為自体を大いに楽しんでいる様子であった。シールは種類の豊富さもさることながら、やはり糊やテープなどの接着剤を使わずとも容易に貼り付けることができるという手軽さも装飾グッズとして選択される大きな要因であろう。その意味では、カラフルな模様入りのビニールテープ等も、好まれるグッズである。手軽さから言えば、カラーマジックもしかり絵や字を描く者も比較的多くみられた（図4）。

一方、ペットボトルから剥がしたラベルや、菓子の包み紙、テープの芯、結んであったすずらんテープといったゴミになる物を、捨てずに逆に装飾物として（再）利用している者も少なくなかった（図5,6）。これはどうやら最初から計画していたのではなく、制作途中で他の者の作品を見ているうちに、「もっと人と違う物にするにはどうしたらいいのか」という工夫から考え出されたアイデアのようである。各自で用意したものは、シールやテープなど、色やデザインは違っても素材としては同じであるので、その場にある別の類の物を利用しようとしたようである。

学生による感想を同種と考えられる記述毎にカテゴライズすると表2のようになる。

各カテゴリー内の代表的な記述を以下に抜粋し考察する。



図4 カラーマジックで描く



図5 テープの芯を利用



図6 すずらんテープを利用

＜1.個性的＞では、「作品からその人らしさがにじみ出ていて、性格まで解るようで、面白かった」「自分なりの工夫や発想を活かして出来上がった個性豊かな作品を、他の人に褒めてもらう経験は、喜びや自信につながる」など、ただ個々の違いを述べるに止まらず、さらに深い発見や発展に及んでいる記述がみられた。

＜2.楽しかった＞では、単純に創作自体を楽しむ記述から、仲間と一緒に作る楽しさに関する記述まで幅広がった。

＜3.コミュニケーション＞では、「普段あまり話さない人とも、道具の貸し借りを通してたくさん喋ることができた」「材料を分けてくれたり、手伝ってくれたりする友達の優しさを感じた」「一人で作っていたら、こんな作品はできなかったと思う。友達とおしゃべりしながら一緒に作ったから、自然にデザインが浮かんできたし、いい刺激を受け、自分でも意外なほどいいものに仕上がった」など、制作を通して行われる人との関わりに関する記述が多くみられた。

＜4.幼児の活動を想定する＞では、「このように子どもたちも遊びながら人間関係を築いていくだろうと思った」「子どもたちがこの作業をする際は脳と手先をともにフル活動させることになり、発達を促すことになるだろう」「自分で作ったものを使うので、愛着がわくだろう」「子どもが自分で作るには難しい部分もあるので、これがかえって協力を生むことにつながると思う」「カッターやハサミなど注意が必要だ」「色々な発想を頭に浮かべて作ることは、子どもにとって遊びながら学ぶことのできる良い経験だと思った」など、発達や学びの期待、援助の仕方、危険に対する注意といった、自分が実際に園児相手にこの教材を扱うことを想定した場合の記述が多くみられた。

＜5.音の違い・発見＞では、「中に入れる物や、その分量によって出る音が違った」「小さめの物を入れた方がキレイな音が出ることが分かった」「ビーズだけより、お米と混ぜて入れた方が高めの細かい音が出た」「どんな物でも音が出ることを知ったので、色々な物で挑戦してみたいと思った」「様々な物を組み合わせて入れることにより、自分が気に入った音を作り出せるのでとても楽しかった」など、予備知識からある程度どんな音が出るのか粗方想像はできるものの、やはり実際に生の音を聴き、その振り応えを実感することによる気づきが大きかったと思われる。

＜6.自分らしさが出せた＞では、「柔らかい雰囲気のマラカスができた」「すずらんテープや

表2 マラカス制作に対する感想

感想のカテゴリー	記述数
1.個性的	24
2.楽しかった	24
3.コミュニケーション	18
4.幼児の活動を想定する	15
5.音の違い・発見	13
6.自分らしさが出せた	13
7.素材に関して	9
8.難しかった	9
9.完成の喜び	4
10.子どもの頃を思い出した	4
総記述数	133

テープの芯など、他の人が使わないものを使う工夫をした」「スパンコールを入れてとにかく目立つようにした」「カラーテープを色々な形切って、キャラクターを作って、みんなに褒められて嬉しかった」「中にカラフルなビーズを入れたので、見えるようにペットボトル自体への装飾はシンプルにした」「とにかく壊れないものを目指した」など、自分の好きなように自分らしく制作ができたようである（図7,8,9）。

＜7.素材に関して＞では、「ペットボトルの材質や、装飾物の色を見極めながら進めていった」「物の色の鮮明さに気づいた」「ビニールテープは形に合わせようと伸ばしながら貼ると、後ではがれてしまう」「厚いテープで巻き過ぎると、いい音が出ない」など、各自準備した物をただ手に取り眺めるだけではなく、実際に工夫して物づくりに利用することにより初めて気づくことがある。

＜8.困難＞では、「ボトル同士のつなぎ目がすぐに外れてしまい、苦労した」「時間がたつにつれ、ビニールテープがはがれてしまい、持つところがベトベトしてしまった」「曲がった面の所に、切った紙を貼りつけるのは難しい」などである。特にボトルの口同士を繋げる工程で最も苦労した者が多く、更に、実際に使っているうちにどんどん取れてしまう者も少なくなかった。この部分が取れやすいことは前もって注意するポイントとして紹介してはあったが、やはり実際に体験してみなければその強度は確認できないので、この「やってみないと分からない」事実を体験することができたようである。

＜9.完成の喜び＞では、「自分だけの物だということによって、その物に愛着が生まれる」「あれこれ悩んで考えながら作ったので、完成した時の達成感がたまらない」など、既製品では味



図7 中のビーズが見えるように



図8 色紙を使って柔らかない雰囲気に



図9 頑丈さでは負けません！

わうことのできない，“愛着”や“達成感”といった記述が目立った。

＜10.子どもの頃を思い出した＞では、「ビーズやシールを交換するのは子どもの頃よくやっていて、大学生になっても楽しさは変わらない事に驚いた」「こどもの頃に集めたビーズを大切ににとってあって、今日はそれを持ってきたので、昔のことを思い出し、その話とかをしながら作業したので、とても懐かしくて楽しかった」など、物を友達と交換する行為は特に女子学生には共通の思い出として残っているようである。

アンケート結果（図10）より、この活動を楽しいと感じた者は受講者全員（31名）であった。難しいと感じた者23名、感じなかった者8名で有意な差がみられた（ $p<0.05$ ）。自分らしさが出せた者27名、出せなかった者4名で、有意な差がみられた（ $p<0.001$ ）。以上より、マラカス制作は、自分らしさが出せる活動であり、難しいがその分楽しく行うことができる活動であると言える。

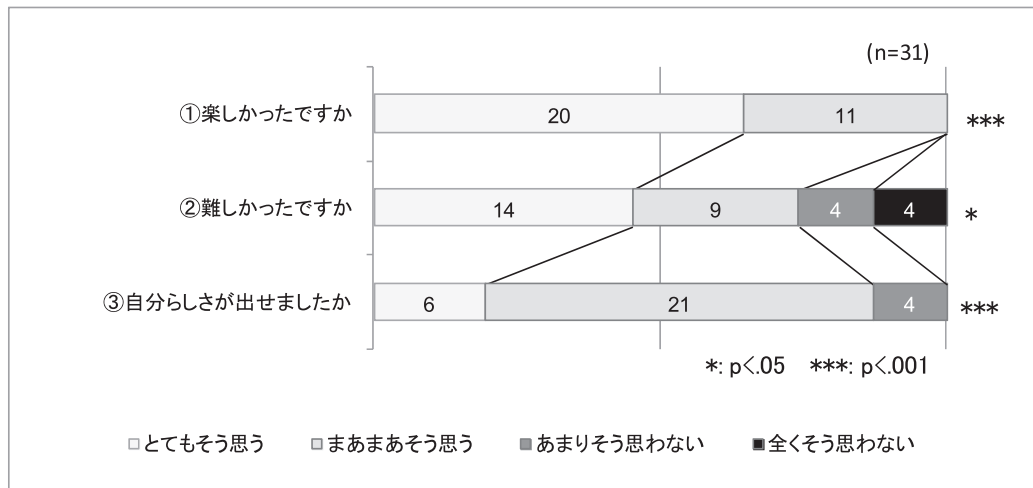


図10 マラカス制作についてのアンケート結果

自由記述による感想文では、難しさについての記述数は9/133と少ない方であったことから、実際難しいと感じてはいるが、それ以上に他に感じたことの印象の方が大きかったと推察できる。

(2) 第2週目（前半40分）：リズムの習得

2パターンのリズムを練習した。

[リズムA]

左右の手に1本ずつマラカスを持ち、2人で向き合って立つ。①右足踏み、②左足踏み、③右足

を斜め右に少し踏み出し、右腰横で左右のマラカスを打ち合わせる、④左足を左斜め前に大きく踏み出し、右手に持ったマラカスをお互い打ち合う。以上の動きを三角形に体重移動する要領で、4拍子に合わせて繰り返して行う（図11）。

基本のリズムおよび動きに慣れたら、④では必ず相手と右のマラカス同士で打ち合うことだけを約束事とし、①②③は自由にアレンジして動く。

〔リズムB〕

リズムAの④のタイミングをスタートとし、「トン・ターンタ・トト・タン」とマラカスで音を鳴らす。トンはマラカスの根元を、タンは先の方を叩く。尚、リズムBは相手と行うのではなく、各自で行う。

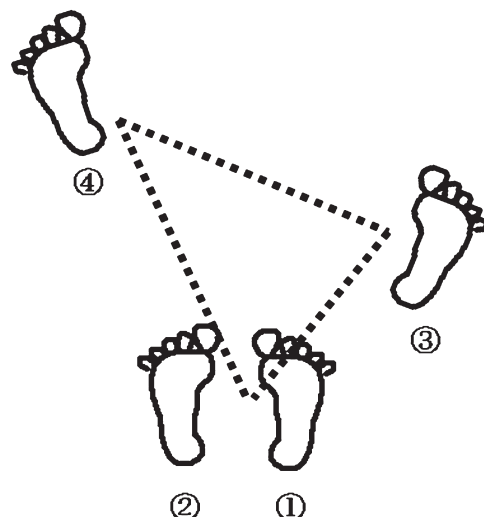


図11 リズムAの足の運び

学生による感想を同種と考えられる記述毎にカテゴライズすると表3ようになる。

各カテゴリー内の代表的な記述を以下に抜粋し考察する。

＜1.難しかった＞では、「リズムを組み合わせると難しくなる」「リズムを理解するのに苦労したが、実際踊りながらやったらすぐにできた」といった感想が見られた。特にリズムAは比較的容易に習得できたが、裏拍が入るリズムBを難しいと思う者が多く、更に2つのリズムを仲間と分担して、一緒に行うことが非常に難しいようであった。

＜2.楽しかった＞では、「全部一緒に合わせるのではなく“④”の時だけ合わせるので、自由さと工夫が生まれて盛り上がる」「一旦リズムに乗ってしまえばいくらでも出来るのに、入るまでがタイミングが判らず難しいが、その迷っている時も楽しかった」「リズムを工夫すれば、もっと複雑な事もできて、更に楽しめると思う」など、決められた動きや簡単な動きよりも、主体的に自ら考えたり、多少の難しさを伴ったりするリズム・動きをより楽しいと感じる傾向が強いようである。

表3 リズム習得に対する感想

感想のカテゴリー	記述数
1.難しかった	26
2.楽しかった	13
3.自分で作った物だから	11
4.幼児の活動を想定する	6
5.コミュニケーション	5
6.達成感	3
7.感覚	2
総記述数	66

＜3.自分で作った物だから＞では、「もとからある物を使うより、自分で作った物を使うとより積極的になれる」「自分で作ったものだから愛着がわく」「自分で作ったものだから、大切にしようという思いから、物の大事さも分かると思う」など、“愛着”“大切にする”という記述が目立った。

＜4.幼児の活動を想定する＞では、「手足を動かすので子どもには難しいとは思うけど、叩いてリズムをとるだけなら子どもでもできるので、保育士になったら絶対にやってみたい」「リズムをもっと単純にすれば、子どもでも充分楽しめる」「子どもたちを主体として考えた場合、ステップを覚えるのにゆっくりと時間をかけなければならない」など、主にリズムの難易度に対する記述が多くみられた。

＜5.コミュニケーション＞では、「2つ目のリズムが難しかったが、得意な友達が助けてくれて、なんとか合わせることができるようになった」「小グループに分かれることにより、活動が行いやすくなることに気づいた」など、1人でもできるリズム習得の練習を、友達と一緒にやることによって（図12）楽しく効果的に行うことができる、といった内容の記述が多くみられた。



図12 みんなでリズムの練習

＜6.達成感＞では、「リズムを組み合わせるのは難しいが、その分、出来た時の達成感はすごくいいものだった」「友達とバッチリ、タイミングが合った時は『よっしゃー！』と思った」など、難しい課題を突破した時に達成感を感じるようである。

＜7.感覚＞では、「自分で叩く時と友達と叩きあう時の感覚の違いが面白かった」「ペットボトルなので、ある程度力を入れて叩いても衝撃が少なくいい音が出るので、爽快だった。マラカスだとただ振るだけだが、マクレレだと叩けるからより感覚に響く」など、マラカス同士を打ち鳴らす際の感覚に対する記述がみられた。

アンケート結果（図13）より、リズムAを楽しいと感じた者は受講者全員（31名）であった。リズムAを難しいと感じた者18名、感じなかった者13名で、有意な差はみられなかった。リズムBに関しては、楽しいと感じた者30名、感じなかった者1名で、有意な差がみられた（ $p<0.001$ ）。また、リズムBを難しいと感じた者25名、感じなかった者6名で、有意な差がみられた（ $p<0.001$ ）。

マクレレのリズムの習得に関して、単純なリズムAは半数が易しいと感じており、仮にこの1種類のリズムのみで行った場合には、退屈さを感じる者も現れてきたかもしれない。やる気・動機づけは、課題の目標が高過ぎても低過ぎても極度の低下を示す（杉原・船越・工藤・中込、

2000) ことから、飽きのこない最適な難易度に設定する必要がある。今回は、やや複雑なリズムBに対してほとんどの者が難しいと感じていると同時に楽しいと感じていることから、2種類のリズムを組み合わせることによって、最適な難易度になったのではないかと推察される。

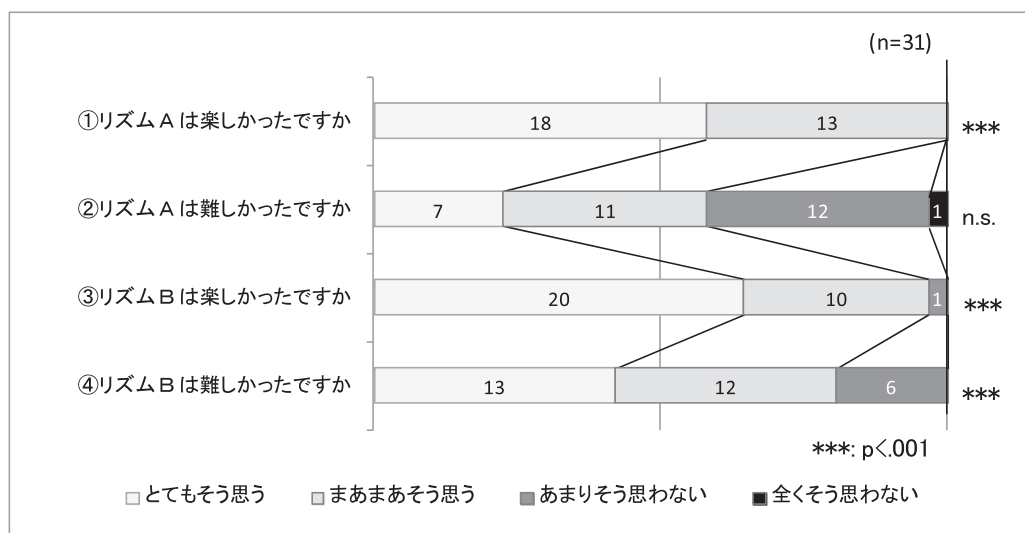


図 13 リズム習得についてのアンケート結果

(3) 第2週目（後半40分）：ダンス創作および発表

6～7人でグループを作り、基本のリズムとステップに加え、オリジナルの振付と構成を考えて発表した。創作時間はおよそ30分。各グループの発表時間は1分程度。

学生による感想を同種と考えられる記述毎にカテゴリズすると表4のようになる。

各カテゴリー内の代表的な記述を以下に抜粋し考察する。

<1. 難しかった>では、「いい動きがたくさん出たが、リズムに合わせることが難しかった」のように、リズムの習得時と同様に、2つ目のリズムをとったり、2つのリズムを重ねたりすることが難しかったようである。

ただ、動きの創作自体は比較的楽しく容易に行うことができた様子だった。また、「練習ではできていても、いざ発表となると出来なくなってしまった」という内容の記述も多くみられた。

表4 ダンス創作および発表に対する感想

感想のカテゴリー	記述数
1. 難しかった	16
2. コミュニケーション	14
3. 楽しかった	13
4. 達成感	11
5. 個性的	10
6. 構成に関して	10
7. 幼児の活動を想定する	6
8. 自己に関して	4
総記述数	84

＜2.コミュニケーション＞では、「みんなで意見を出し合って考えたので、満足のいく踊りになった」「皆でいろいろ試したり、一緒に身体を動かすだけで連帯感が生まれる」「1人でダンスを考えるのはやりにくい、グループで考えたりするのはみんな楽しめる」「自分が考えた動きを皆が取り入れてくれたときは嬉しかった」など、仲間と協力して作り上げたことに対する喜びや満足感を表す記述が多くみられた（図14）。



図14 アイデアを出し合う

＜3.楽しかった＞では、「発表する側だけではなく、見る側もリズムを作り出しながら見るので楽しかった」「今回はグループに分かれたが、全員でやったら更に楽しくなるだろうと思った」「リズムもダンスも上手にできなくてもみんな笑顔で体験していたので、とても幸せで楽しい気分になった」など、“みんなでやったから”楽しかったという感想が圧倒的に多かった。特に、見る側も音を出す形で参加するという形態が一体感を深め、また、「見る-見られる」の関係を薄め、過緊張化を防いでいたと思われる（図15）。



図15 観覧側も音を出して参加

＜4.達成感＞では、「みんなで成し遂げた時の達成感を味わった」「本番でリズムにうまく乗れなくなり苦戦したが、なんとか踊りきれて、やりきった感がある」など、1分ほどの短い発表であったが、上手く踊れていようとそうでなかろうと達成感を味わったようである（図16）。



図16 キメのポーズ

＜5.個性的＞では、「どのグループも自由な発想で、バラエティに富んでいた」「他のグループの発表を見て、自分たちが思いつかないような動きや並び方が出てきて面白かったし、教えてもらい踊ってみたいと強く思った」など、他のグループとの違いを発見し、そこから動きや構成のレパートリーを増やそうと意欲を持った者もいた。

＜6. 構成に関して＞では、「ダンスを作って踊って終わりではなく、他のグループの表現の仕方や個性を見ることができて面白かった」「いきなり創作だったら路頭に迷っていたと思うが、基本をしっかりと覚えた後での創作だったので、スムーズに創作に入れたし、とても楽しかった」など、授業の流れを客観的に捉え、理解している者もいた。

＜7. 幼児の活動を想定する＞では、「子どもの方が奔放に動く分、個性的な動きが多くなると思う」「積極的に人と関われない子どもでも、自然に中に入り一緒に楽しむことができると思う」「子どもたちも、自分で作った物を使って踊るということが、嬉しかったり楽しかったりするんだろうなと思った」など、この教材の、幼児の活動に対する可能性を期待するような記述が多くみられた。ステップ習得の際に見られた難易度に関する記述はみられなかったが、「大人でも本番は練習通りにできるとは限らないと実感したので、お遊戯会などの発表する場面で、練習通りに出来なくなるのは当り前のことだといつも思いながら、幼児の援助をしたい」というように、発表本番に対する難しさに着目し、自らの体験を踏まえた上での現場への展望に至る者もいた。

＜8. 自己に関して＞では、「自分が思いついたダンスを人に発表するということもなかなか恥ずかしかった」「振りを覚えるのが苦手」「本番とても緊張した」など、実際に体験することによって得られた気づきに関する記述がみられた。

アンケート結果（図17）より、楽しいと感じた者29名、感じなかった者2名で、有意な差がみられた（ $p<0.001$ ）。難しいと感じた者7名、感じなかった者24名で、有意な差がみられた（ $p<0.01$ ）。自分らしさが出せた者22名、出せなかった者9名で、有意な差がみられた（ $p<0.05$ ）。以上より、ペットボトル・マクレレを利用したダンス創作および発表は、困難さをさほど感じることなく創作し、楽しみながら踊ることができる活動であると言える。一方、自由記述による感想文では、難しさについての記述数が16/84で最も多い。この一見矛盾しているような結果であるが、自由記述の内容を詳しく見てみると、「練習ではできたのに、本番は思

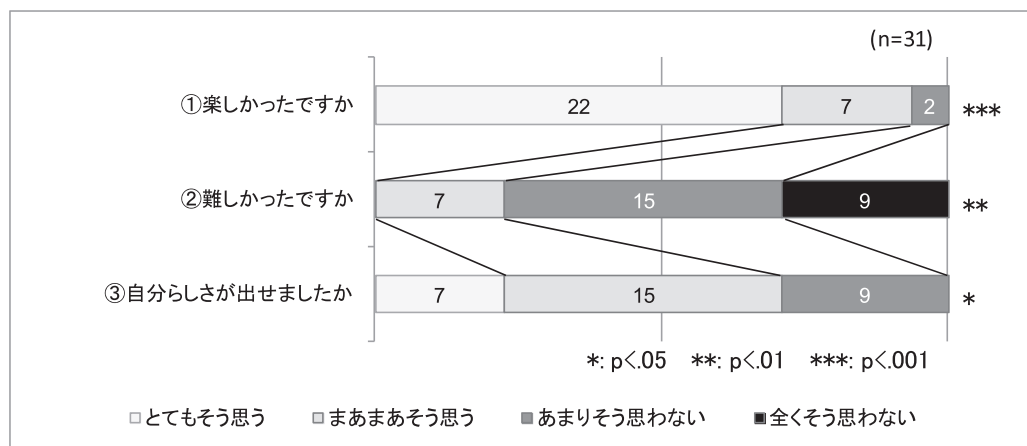


図 17 ダンス創作および発表についてのアンケート結果

うようにできなかった」という記述数が顕著であることから、「創作は容易であったが、発表は難しかった」のではないかと推察される。アンケートの質問設定を「創作時」と「発表時」とに分ける必要があった。

4. まとめ

造形表現にあたるマラカス制作は、当初個人作業のつもりで計画をしていたが、ふたを開けてみると、道具の貸し借りや材料の交換、そして困難な作業に対する協力などをきっかけとした他者との交流が頻繁に行われていた（図18,19）。保育における子どもの表現は、体を媒介にして、またモノを媒介にして、そしてそれら二つをミックスしながら、他者と創造的にやりとりしていくプロセスであり、それは、他者を理解しようとやりとりし、同時に自分自身を理解しようとやりとりしていくプロセスでもある（花原，2005）ことから、本教材においてこのような他者との密な交流が多く生まれたことは、非常に望ましい結果である。



図 18 一緒に色を塗る



図 19 押さえてもらう

カテゴリーの数と名称を造形表現・音楽表現・身体表現の3つの活動で統一してはいないため厳密な比較はできないが、「コミュニケーション」の項目は、リズムの習得のように、ある課題を習得するタイプの活動よりも、マラカス制作やダンス創作のように自ら考え生み出すタイプの活動で、より上位にくる傾向があることが見て取れる。学生自身が主体となっていく創造的活動は、総合的な表現力を養い、現場イメージを養うのに有効と考えられている（近藤・松實・安田，2007）ことから、保育実習において教科の枠を超えた発展した活動を計画することができない学生が多い（智原・下口，2008）現状において、本教材は有効な学びの体験の場になったと思われる。

身体表現にあたる「ダンス創作および発表」を難しいと感じた者が、音楽表現にあたる「リズムの習得」に比べて少なかったのは、前者が創造型であり不正解がない課題であり、後者が習得型であり不正解がある課題であったためと考えられるが、単純に授業内での体験時間の差

の影響も考えられる。全15回の授業のうち、ペットボトル・マクレレの回以前に身体表現に関する実技を4回行っているのに対し、音楽表現の実技は1回のみであった。さらに、身体表現領域においては、音楽に合わせて踊る（換言すれば、音楽・リズムがよりどころとなる）ものと、考えやイメージ、テーマなどがよりどころとなり、そこから動きが生まれるものとの大別できるが、前者、特に既成の振付で踊るタイプのものが、子どもだけではなく、現場に携わる保育者にとっても人気がある（古木・佐藤，2008）。既成の振付で踊るのは、振付を覚えれば誰でも踊ることができる簡便性を備えているが、これは他者から与えられた動きに過ぎず、想像性を養いイメージを豊かにするとは言い難い（古木・佐藤，2008）。しかしながら、イメージや動きをベースにした表現遊びを実際に保育現場において実践する者が少ない傾向にある（高原・瀧・宮嶋，2007）。ことや、音楽に合わせて踊ることや身体各部位の動きの組み合わせから運動を創り出すことは楽しそうに活動するが、自分の感じたことや考えたことを身体の動きを通して表現する課題に対しては苦手とする学生が多い（田辺，2005）。ことから、本授業ではその対策として、身体表現の実技を行うに際し、「考えやイメージ、テーマをもとに動きを創り出す」表現遊びを主に行ってきた。その成果もあってか、受講者は「創作する」ことに対しての苦手意識を持つことなく、それほどの困難さを感じずに楽しみながら創作をすることができたのではないと思われる。

保育者が興味関心のあるものや得意なことに、幼児は惹きつけられる（遠藤，2006）。従って、幼児が自分自身のからだで動きで豊かな感性や表現力を養い、想像性を豊かにするためには、何気ない生活の中で面白さを発見できる保育者自身の感性が必要であり（遠藤，2006）、また保育者自身が創造的な「あrawし」経験を積み重ね、保育者自身の身体表現能力を高めることが必要である（田辺，2005）。今回扱ったペットボトル・マクレレは、その「あrawし」経験の一つとなり、保育士養成課程における表現教育の複合的教材として、学生に多くの学びと気づきをもたらしたと言える。

当日欠席者が多く、受講者全員の感想が反映されている訳ではないため、完全なクラス単位としての結果であるとは言いにくい。が、本教材を体験した感想で「作品を作って見て終わるのではなく、自分で作ったものを実際に使って、音楽やダンスをするのはとても楽しく、有意義である」といった内容の記述が際立って多かったことから、「一まとまりの表現」としての意識が、受講者の中に芽生えたのではないかと、期待できる。

今後、本教材の展開としては、リズムのパリエーションを増やし、難易度を数段階設けることによって難易度の調節をしやすくする必要がある。このリズムも、教官が提示するのではなく、学生自身が自ら考えて生み出す時間を設けて行うことが、表現教育の本質に繋がるものと考えられる。

引用文献

- 遠藤 晶（2006）．幼児の身体表現の指導に関する保育者の意識について - 身体表現の指導に関する困難さについてのアンケートの検討を通して - 武庫川女子大学紀要（人文・社会科学）54,91-99
古木竜太・佐藤みどり（2008）．保育者養成課程における身体表現活動に関する学習内容の検討 国際学院埼玉短期大学研究紀要 29,101-108

- 花原幹夫 (2005). 保育ライブラリ保育の内容・方法を知る 保育内容表現 北大路書房
- 近藤正子・松實輝彦・安田信子 (2007). 保育者に求められる身体表現力とは (2) - 学生の意識調査と実技科目連携の試み - 甲子園短期大学紀要 26,125-132
- 厚生労働省 (2008). 保育所保育指針
- 三田雄士・カルメン=ミタ (2005). はじける肉体の即興芸術カポエイラ 現代書林
- 文部科学省 (2009). 幼稚園教育要領
- 名須川知子・高橋敏之 (2006). 保育内容「表現」論 ミネルヴァ書房
- 杉原隆・船越正康・工藤孝幾・中込四郎 (2000). スポーツ心理学の世界 福村出版
- 高原和子・瀧 信子・宮嶋郁恵 (2007). 保育者の保育内容「表現」の関わりとその方法 - 表現活動を引き出す手だてについて - 福岡女学院大学紀要. 人間関係学部編 8, 57-62
- 高野牧子・小田ひとみ (2002). 線画を題材とした幼児の身体表現 日本保育学会大会発表論文集 (55), 272-273
- 田辺圭子 (2005). 保育者養成における身体表現～実技講習に対する保育者の感想からの検討～ 北陸学院大学短期大学部紀要 37,25-33
- 智原江美, 下口美帆 (2008). 大学における科目を連携させた授業の取り組み-「図画工作」と「幼児体育」の授業実践報告- 京都光華女子大学短期大学部研究紀要 46,195-219
(2011.10.4 受稿, 2011.11.15 受理)